



提供：山階鳥類研究所

## 6代・8代会頭 黒田長久 KURODA Nagahisa

1916 (大正 5)–2009 (平成 21). 会頭在任期間 1970–75, 1981–90

唐沢孝一 (都市鳥研究会)

1916年東京都港区に生まれる。福岡藩黒田長政から数えて15代目当主にして父は本会4代会頭黒田長禮。父子二代にわたる日本を代表する鳥学者である。恵まれた環境(広大な赤坂の屋敷や羽田の鴨場など)と鳥学者である父の薫陶を受け、幼少のころより鳥への関心を育む。1937年に東京帝国大学理学部動物学科に入学。卒業後は外務省に入るが半年で徴兵。近衛師団司令部鳩班長(陸軍中尉)として伝書鳩の飼育・研究に携わる。戦後、1947年にGHQ(連合国軍司令部)天然資源局野外生物課(技術顧問)、1951年米軍第406医学総合研究所ヴァイラス部鳥学課(顧問)をへて1952年山階鳥類研究所に入所、1989年所長、2002年名誉所長。

黒田の学位論文はミズナギドリ類の骨格に関する研究であり、その後の研究は米寿までを記した「業績目録」(鳥26巻2/3号)だけで34ページに及ぶ。米寿以降の論文・著作を加えるとさらに膨大になる。黒田論文の傑出している点は一分野に偏ることなく、「分類・分布・形態(解剖)・生理・生態・行動・進化・渡り・保護(保全)・調査」と鳥学全体をカバーしているところにある。しかも、研究者であると同時に優れたナチュラルリストであり、鳥への愛情もまた奥深い。米寿の自著『時に集うムクドリとカラスの世界』(2004)の一節に、「ある観察の目的に費やす時間は決して無駄ではない」というティンバーゲンの言葉を引用し、「同じ観察を繰り返しているうちに、次第にムクドリの気持ちや好みがわかるようになり、時間の浪費もすくなくなった」「次々と疑問が起こると、それを確かめるために冬でも夏でも、私にとっては有益な時間の浪費に出かけなければならない衝動となった」とあり、鳥に接する真摯な姿勢が伺える。著書は『動物系統分類学 鳥類』(中山書店)、『鳥類生態学』(新思潮社)、『東京のハシブトガラス』(英文)など多数。

一方、黒田(久)は本会会頭を6代と8代の2回つとめた。その理由は家庭の事情であり、森岡

(2009)は「あらゆる役職を辞してご子息の看護にあたった」、「(その後)博士は研究に復帰。黒田長久会頭の期間の間に古賀忠道会頭の時代が挟まっている」と記している。黒田(久)の人柄は「長禮博士のご長男で、謹厳・厳格・公正・寡黙・筆まめなどの長禮博士の資質を間違いなく受け継いでおられた」(森岡2009)。また、学会運営は些細なことは幹事に一任していた。が、重要な案件に関しては自身の意見・提案を当時庶務幹事であった筆者宛に速達で郵送するなど「筆まめ」であった。黒田父子の日本鳥学会への貢献は大きく、森岡(2009)は「多数の研究業績だけでなく」「戦前から戦後の困難な時期にこれを維持して下さった」「私が引き継いだ頃までの学会は文字どおり万年赤字であった。黒田父子が人知れず支えてくださらなければ学会は消滅したと思う」と当時を振り返る(→黒田基金については第6章を参照)。

役職も多く、山階鳥類研究所所長、日本鳥学会会頭の他に、日本野鳥の会会長、我孫子市鳥の博物館館長、日本生物地理学会会長などを歴任した。鳥類研究はもとより広く社会教育・自然保護(保全)につとめた。本会会頭を辞し日本野鳥の会会長に就任した1990年、「日本鳥学会、日本野鳥の会、山階鳥類研究所などが大連合し、和の交流を大切にしたい」と胸の内を語っている(唐沢2009)。黒田について山階(1977)は「分類学・形態学・解剖学・生態学等ひろい分野にわたって、たしかな知識をもっておられる。このような型の鳥学者としては日本で最後の方になるかもしれない」と評している。2010年、日本鳥学会は鳥学発展に貢献した黒田父子の功績に敬意を表し「黒田賞」を創設した。酒豪であり、時に黒田節を歌い、自ら作詞作曲した鳥の歌を独唱したこともある。晩年も執筆活動は衰えを知らず、『黒田長久・鳥絵の夢』(1994)・『鳥の詩』(2002)・『空のアトリエ』(2004)などを著し、詩人・画家としての一面も遺した(唐沢2009)。鳥学を越えた鳥学の泰斗であった。